

# 根拠をもって自分の考えを 表現できる児童の育成

～教職員がつながり、児童がつながり、  
家庭とつながり、地域とつながる～

忠岡町立東忠岡小学校

## Why

なぜ取組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- 根拠をもって自分の考えを表現できる力に課題があった。
- 学年、部会、教科をこえてつながる取組みが必要だった。  
（つながりを意識した系統的な取組みが少なかった）
- 一人一台端末をより有効に活用する必要があった。

## How

どのように取組みを進めたか（取組みの概要）

- 各学年の取組み（まなびプラン）の共有化・見える化
- 縦割り活動「レインボータイム」の設置
- 各学年校内研究授業・事後検討会の活性化（【協議→共有→実践】の早いサイクルでの実施）
- 児童・家庭・地域とつながるための情報発信
- ICTの活用による、個別最適な学び・協働的な学びの実践研究

## Change

どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- 授業を系統的につなげる意識が向上した。
- 一人ひとりの児童の成長を、全職員で見る“場”が増加した。
- 校内研究を日々の授業実践にすぐつなげるサイクルが定着した。
- 「家庭・地域とつながって児童を教育する」という教職員の意識が向上した。
- ICT機器の得意・不得意をふまえた指導方法を見極めて指導できるようになった。

# 1. 令和3年度の取組み

## (1) 研究体制の見直し

本校がカリキュラム・マネジメントに取り組んだ背景として、

### ① 児童の表現する力が伸びない

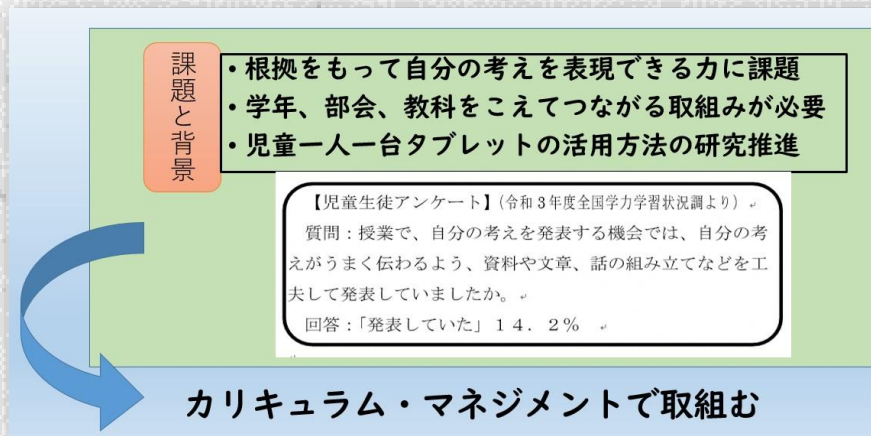
(全国学力・学習状況調査等による)

### ② これまで教職員がそれぞれの持ち場で取組みを進めていたが、つながりを持ち、系統的に取り組む実践が少ない

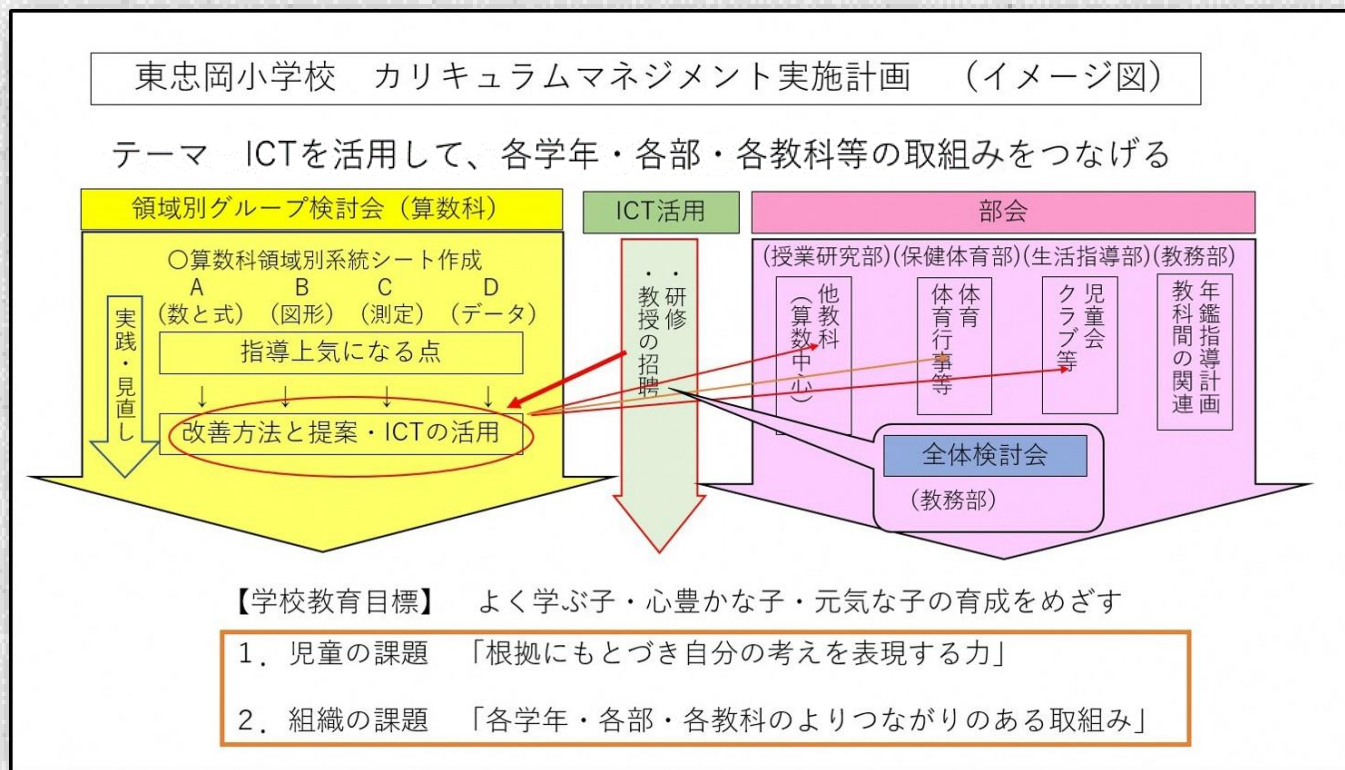
### ③ 1人1台端末をどのように使っていくのかを研究する必要がある

…の3点の改善を図る必要があった。そのためにカリキュラム・マネジメントに学校全体で取組み、児童の課題に正対していきたいと考えた。

令和3年度は、大テーマを「ICTを活用して、各学年・各部・各教科等の取組みをつなげる」と設定し、算数科を中心とした研究を進めることにした。



まず、令和2年度までの取組みの課題を洗い出し、学校全体でカリキュラム・マネジメントを進めるために研究体制の見直しをおこなった。





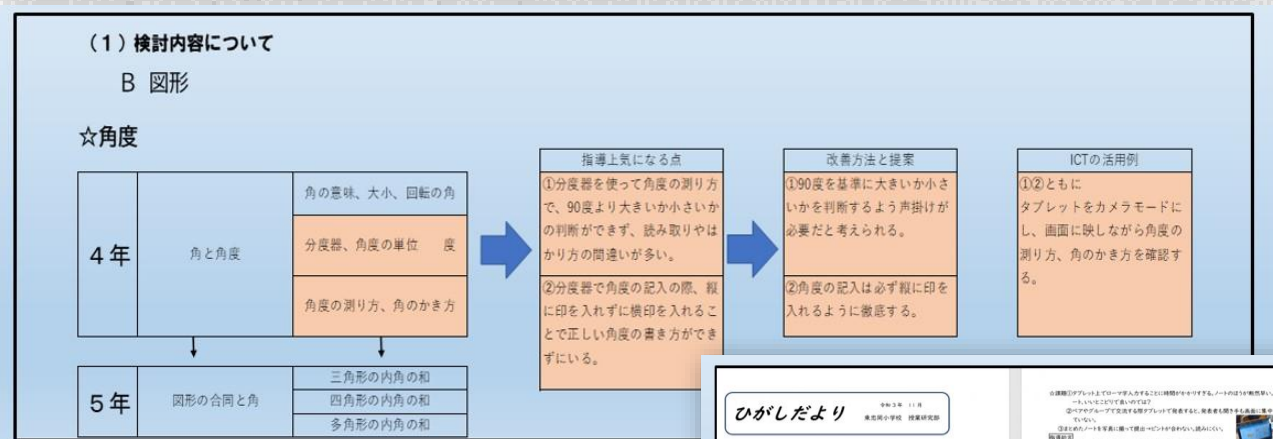
## (2) 単元配列の見直しと領域別研究の実施

年間カリキュラム全体を見直すため、単元配列表（カリマネ表）を学年ごとに再構築し、教科と教科、教科と特別活動や学校行事といったつながりの見える一覧表を作成した。つながり部分を線で結ぶのではなく、色分けをして関連がぱっと見てすぐにわかるようにし、関連のある内容は指導時期を入れ替えて効果的な指導ができるように配慮した。

また、教職員どうしが学び合う場の設定として、算数領域を「数と計算」、「図形」、「測定・変化と関係」、「データの活用」の4グループに分けて研究を進めることにした。各領域で、学年間のつながりや指導上気になる（工夫が必要と思われる）点、改善方法と職員への提案、ICT活用場面の設定という内容を網羅した「領域別系統表」を作成することから始めた。その後、領域別に研究授業を実施し、研究の成果を確認した。事後検討会で話し合った内容は「ひがしだより」として全職員で共有し、有効な手立てやICT活用の参考とすることができた。

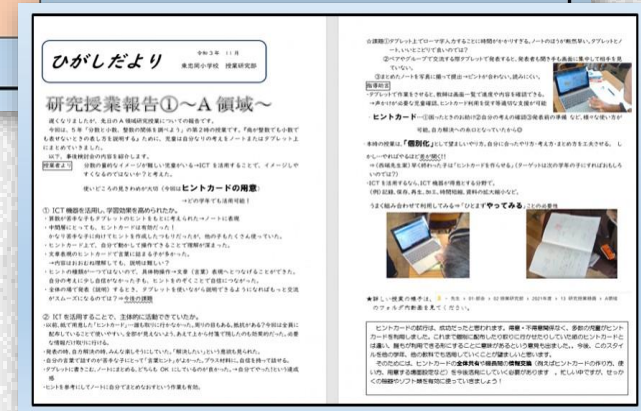
グループ内では日々の相談や情報共有も行われ、教職員どうしのつながりも深まった。

**単元配列表の再構築**  
つながり部分を線で結ぶのではなく、色分けをして関連がぱっと見てわかるように工夫した。横軸が月ごと、縦軸が教科や領域、行事ごとに並んでいる。



**算数の「領域別系統表」**  
「指導上気になる点」と、その改善方法や提案を矢印でつないだり、「ICTの活用例」を事前に想定したりして、研究授業での取組みに活かした。

**「ひがしだより」**  
研究授業後には、事後検討会での内容を右図のようにして通信を発行し、全教職員で共有した。



### (3) ICTを活用した 授業実践の蓄積

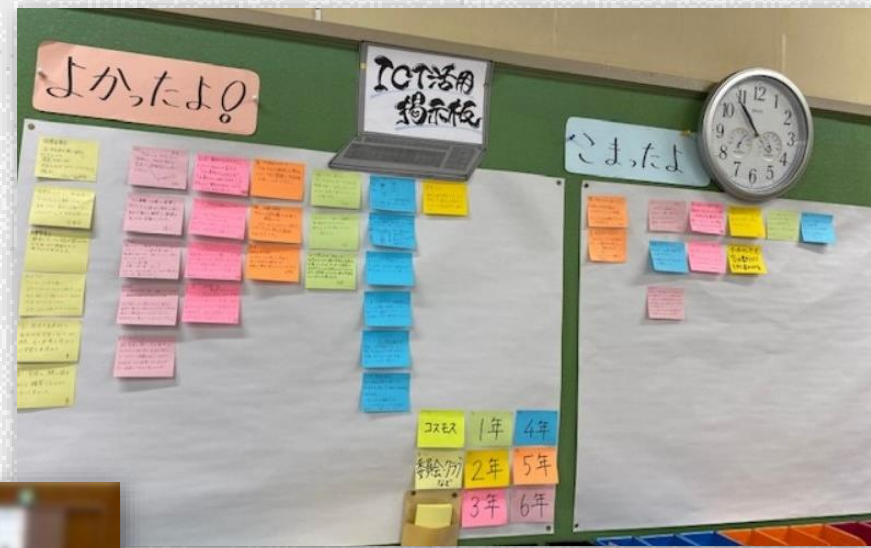
児童1人1台タブレットの活用にあたり、どの場面でICT機器を利用するのが有効か、児童の学びをよりよいものにできるかという実践内容を学年ごとに蓄積し、資料として全校で共有することにした。

「ICT活用シート」への記録をサーバー上で共有するという手段をとったが、「日常の授業へすぐに活用するのは難しく、今すぐに悩みを解決したい」、「ICT活用について行き詰っている」等の課題が浮かび上がった。

そこで、児童会が取り組んでいた「元気玉」というメッセージボードをヒントに、付箋を使って教職員同士がメッセージのやりとりをする掲示板を作成した。授業を実践してみて「よかったよ」「こまったよ」と感じた内容を学年カラーの付箋に書き込み貼り付けるというものだが、すぐに見られて記入にも時間がかからないのですぐに各自の実践に結び付けることができた。



**<Before> ICT活用シート**  
左図のような様式に、各教科での取り組みを入力し、サーバー上で共有していたが、日常的に活用するには不向きだった… (シートを作ることが目的化してしまう)



**<After> ICT活用掲示板**  
職員室後ろの掲示板に、ICTを活用して「よかったよ!」、「こまったよ」という点をそれぞれ書き出して、いつでも誰でも、付箋に記入して貼れるようにした。学年別に色分けをして、学校全体で課題や成果を共有することができ、学年を超えたコミュニケーションを生み出すことに成功した。





# 2.各学年の取組みの共有化・見える化

## (1)年間計画の見直し

令和3年度の取組みの反省として、

- ①教科、部、学年をつなげる取組みを日々の授業にいかに関与させるか
- ②PDCAサイクルのCAに係る時間をいかに効果的に作ることができるか

…という課題が浮かび上がった。

そこで、令和4年度の取組み内容を図のように3点に絞り、さらに効果的なカリキュラム・マネジメントを実施するため、令和3年度に作成した「カリキュラム・マネジメントの実現に向けた年間スケジュール」を参考にして、年間計画を見直すことから始めた。

### 令和4年度の方角

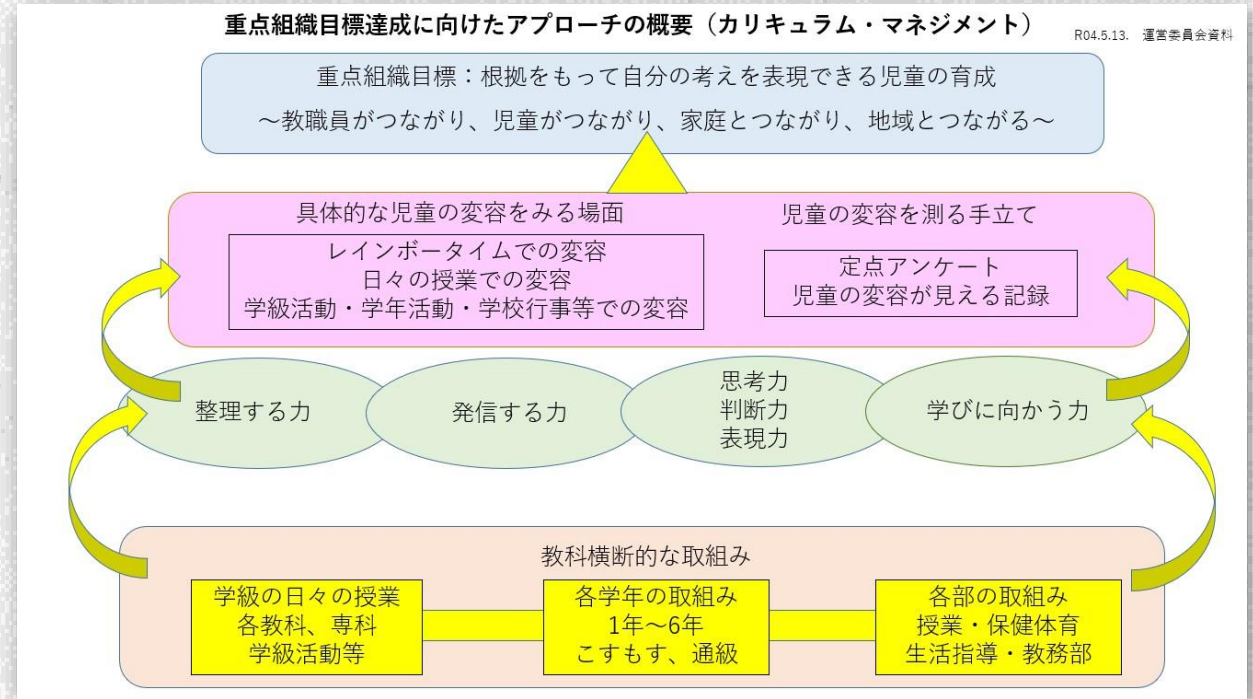
<テーマ>

根拠をもって自分の考えを表現できる児童の育成

<取組み内容>

- ・教職員をつなげる
- ・ICTを活用する
- ・4つのエリアで教科横断的な実践に取り組む

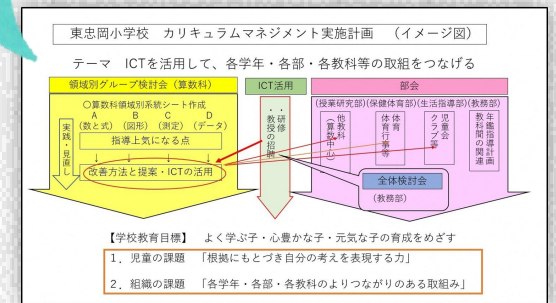
情報の整理   情報の発信   思考力・判断力・表現力等の育成   学びに向かう力、人間性等の育成



学校名	忠岡町立東忠岡小学校	研究テーマ	B 学習の基礎となる資質・能力の育成に向けた研究 「学習の基礎となる資質・能力の育成に向けた研究 学校教育目標の実現をめざして ICTを活用して取組みをつなぐ」			
「カリキュラム・マネジメントの実現に向けた年間スケジュール例」						
月	No.	内容	対象	PDCA	成果・課題	関連性
4	1	・学校教育目標に向けての方向性の確認	教職員	P	○課題やテーマを共通理解することで方向性をそろえて動き出すことができた。 ○転動してきた教職員と情報共有がスムーズにできた。	1
	2	・カリキュラムマネジメント計画の確認	教職員	P	○研究テーマに沿った取組みについて共通理解することができた。	
	3	・各学年で年間指導計画の作成、実施	教職員	P	D	1,2
	4	・領域別グループ検討会	教職員	P	D	1,2
5	5	・部会	教職員	P	○授業研究部、保健体育部、生活指導部、教務部に分かれ、取組みのつながりを検証していくことで共通理解できた。	1,2
	6	・実施、見直し	教職員	D	C	
	7	・全国学力学習状況調査すくすくウオッチ	5・6年生	Re	○これまでの成果を測ることができた。	4
	8	・領域別グループ検討会	教職員	C	A	

令和3年度に作成した「カリキュラム・マネジメントの実現に向けた年間スケジュール」

<After> 令和4年度カリマネ概要図  
目標達成に向けて、アプローチの方法や、取組み内容、つながりについて見直した



<Before> 令和3年度実施計画イメージ図

カリキュラム・マネジメントの手引き  
忠岡町立東忠岡小学校

## 2.各学年の取組みの共有化・見える化

# (2)学年別「まなびプラン」の設定・公開

1年間をⅠ～Ⅳ期に分けた、各学年による「まなびプラン」シートを作成した。なるべく短いスパンでPDCAサイクルを実施し、端的に評価してすぐ次の実践へつなげていくというサイクルを定着させた。全学年のまなびプランは校内の共有フォルダでいつでも見られるようにしている。長期休暇には全学年や各部会から集まった「まなびプラン」をもとに教職員全体で検討・協議する機会も設け、今後の見通しを持つための教職員間交流は大変有効であった。

東忠岡小学校 (3)年 まなびプラン Ⅰ期

校内研究テーマ 根拠をもって 自分の考えを表現できる児童の育成

今期学年目標  
①自分の考えを書く。  
②クラス全体に聞こえるように発表する。  
③発表している人を見て聞く。

具体的な取組み  
①自分の考えを書く。  
各教科で自分の考えを書いたり説明する。考えには理由をつけることを意識。  
②③掲示物  
朝学、宿題、授業などで基礎学力を

成果  
①考えは書けるようになってきた。  
②発表する機会を多く作ることができた。  
③掲示物や教師の声かけて少しづつうなってきた。

課題と次期への見直し  
①考えは書いているが、まとまっている。根拠を持って自分の考えを表現、思考ツールの活用、接続語(まず)を書かせる。②読むだけでなく伝わる

東忠岡小学校 (4)年 まなびプラン Ⅱ期

校内研究テーマ 根拠をもって 自分の考えを表現できる児童の育成

今期学年目標  
①自分の考えを理由をつけてノートに書く。  
②友達の意見を聞いてメモする。  
③ペア活動やグループ活動を通して自分の意見と同じ所や違うところをみつけて発表する。

具体的な取組み  
①自分の意見を書くときに、理由まで書けるように意識させる。  
②発表している児童の方を向いて話をしっかり聞けるように声掛けをする。  
③友達の意見を聞いて、どこが同じで、どこが違うのかを、発表者に返すことのできるようになる。

成果  
①自分の意見を書くときに、理由まで書けるよう児童が増えてきている。  
②発表している児童の方を向いて聞く児童が増えてきている。  
③友達の意見を聞いて、自分の意見を言うだけになる争が多い。

課題と次期への見直し  
①自分の考えを書くときに、結論から書いて、そのあとに理由を書けるように、書き方が定着できるよう声掛けをする。  
②発表を聞きながらノートを書こうとする児童がいるので、聞くときは聞く、と、メリハリをつけられるようにする。  
③友達の意見を聞いて自分の意見との違いなどに気づき、返せるように話し合いの練習が必要。



まなびプラン様式



まなびプラン  
全学年の概要

## まなびプラン全学年の概要

	Ⅰ期 (5月～7月)	Ⅱ期 (8月～10月)
1年	今期学年目標 ・自分の考えを表現する(挙手、話し言葉など)。	・自分の考えを表現する。 ・「話す・聞く」の徹底。
	具体的な取組み ・表現方法を教える。 ・簡単な2択問題に取り組み。(例「いぬ」「ねこ」どちらが好きですか?など) ・話す機会をたくさん設ける。	・表現方法を教える。 ・簡単な2択問題に取り組み。(例「いぬ」「ねこ」どちらが好きですか?など) ・話す機会をたくさん設ける。
2年	今期学年目標 ①自分をもつ。→書く。 ②友だちの話を最後まで聞く。 ③クラスに聞こえる声で話をする。	①引き続き、安心して発表できるクラスの雰囲気作り ②自分の考えをもつ。また、それを書き表す。 ③ペアや生活組に自分の考えを話す。
	具体的な取組み ①書く・話すポイントの共有 ②話すときの姿勢の導入 ③発表 ④自分の感情や考えを書く。 →どこかへ書く・読む・文章で書くことが難しければ、本文に線を引かせる。 ⑤発表 ⑥個人解決の時間を設けて、自分の考えをノートに書くようにさせる。 また、答えの出し方や考えを説明する際は、ノートを見せたり、ブロックを動かしたりしながら説明できるようにさせる。 ⑦ペアや生活組と話す時間の確保	①話す・聞くポイントの徹底 ②発表を意識した発表をする ③短くてもいいので、自分の考えを持つ。またそれを書き表す。 ④個人解決の時間にて考える権利、自分の考えをノートに書くようにさせる。 また、答えの出し方や考えを説明する際は、ノートを見せたり、ブロックを動かしたりしながら説明できるようにさせる。 ⑤ペアや生活組と話す時間の確保
3年	今期学年目標 ①自分の考えを書く。 ②クラス全体に聞こえるように発表する。 ③発表している人を見て聞く。	①自分の考えを書く。接続語を意識して。 ②クラス全体に聞こえるように発表する。指しながら。 ③発表している人を見て聞く。うなずく
	具体的な取組み ①自分の考えを書く。 各教科で自分の考えを書いたり説明させたりする。考えには理由をつけることを意識させる。 ②掲示物、朝学、宿題、授業などで基礎学力をつける。	①自分の考えを書く ②各教科で「思考ツール」を使っていく。 ③話し合いや発表の時間を多く設定する。 ④朝学で基礎学力をつける。
4年	今期学年目標 ①自分の考えをノートに書く。 ②友達の意見を聞く。 ③ペア活動やグループ活動を通して自分の意見と同じ所や違うところをみつける。	①自分の考えを理由をつけてノートに書く。 ②友達の意見を聞いてメモする。 ③ペア活動やグループ活動を通して自分の意見と同じ所や違うところをみつけて発表する。
	具体的な取組み ①自分の意見を書くときに、理由まで書けるように意識させる。 ②発表している児童の方を向いて話をしっかり聞けるように声掛けをする。 ③友達の意見を聞いて、どこが同じで、どこが違うのかを、発表者に返すことのできるようになる。 ④ペアやグループ内で発表できるようにする。	①自分の意見を書くときに、理由まで書けるように意識させる。 ②発表している児童の方を向いて話をしっかり聞けるように声掛けをする。 ③友達の意見を聞いて、どこが同じで、どこが違うのかを、発表者に返すことのできるようになる。 ④ペアやグループ内で発表できるようにする。
5年	今期学年目標 ・ペア活動・グループ活動を通して、 自分の考えに自信をもつ。 ②それぞれの考え方の共通点や相違点をとらえる。	・算数科において「どうしてその式になったのか」説明する力を付ける。 グループ活動の中でわかっている児童が話を進め、周りの児童も自信をもつようになることが多いため、わからない児童の根拠を聞き取ることのできる話し合い活動にする。 ・自信をもって発表できる児童を増やす。
	具体的な取組み ・どのようにして導き出した答えなのかを話し合う。 ・叙述となる文章を見つめる。 ・既習内容とのつながりを意識して、自分で考える時間をとる。	・考えに対して、なぜそのような式になったのかをノートに書く。 ・自分の考えを班で交流する。
6年	今期学年目標 ①自分の考えを持つ。 ②その考えを自分で文章化する。	・問題をきちんと捉えることができるようになる。 ・根拠となる部分を見つけ、示す方法を考えさせ、練習させる。
	具体的な取組み ・根拠となる文章に線を引く練習をする。 ・見つけたものをもとに自分の言葉で書きかえる練習をする。 ・問いに正対した答え方を意識させる。	・問いをしっかりと読み、文や図に印を入れさせることで、何を問われているのか(何を答えなければいけないのか)を捉える練習をさせるようにする。 ・自分の考えを何かに書くときに、文章や図、表など使って表現させ、理由を書かせるようにする。
こずもず	今期学年目標 ①自分の考えを表現する。 ②友だちの話を最後まで聞く。 ③声の大きさに気をつけて発表する。	①自分の考えを理由をつけて表現する。 ②友だちの話を体に向けて最後まで聞く。 ③声の大きさに気をつけて発表する。
	具体的な取組み ①「話し方モデル(レベル2)」を提示して、発表のときに意識させる。 ②発表している児童の方に体に向けて、目を見て聞くように声をかける。 ③声の大きさを提示し、適切な声の大きさを発表できるように意識させる。	①「話し方モデル(レベル2)」を提示して、発表のときに意識させる。 ②発表している児童の方に体に向けて、目を見て聞くように声をかける。 ③声の大きさを提示し、適切な声の大きさを発表できるように意識させる。

### まなびプランを実施して(教職員の声より)

- ・PDCAサイクルを各学年で的確に実施する上で、有効な手だてとなった。
- ・短期間で取組みの成果と課題を見極めるので、タイミングよく学年の活動方針を見直すことができた。他学年の取組みを参考にしながら考えられ、系統性も考慮しながら話し合った。



### (3)取組み報告の共有 「まなびレポート」の見える化

各学年の取組みを、教職員や児童、保護者等へ共有・発信できるよう、「まなびボード」を設置し、そこへ各月の取組み「まなびレポート」を掲示し紹介した。普段授業を相互参観するゆとりが持てないが他学年の取組みには興味があり、情報を交流したいと考える教職員にとってだけでなく、参観や懇談等の行事の際に保護者・地域への情報発信ツールとして有効であった。学校・家庭・地域それぞれの「つながり」を意識するためにも意味があったと考えられる。



#### 「まなびレポート」

毎月掲示板に学年の主な取組みを紹介した。

本来なら授業を相互参観するのが望ましいが、時間の確保が難しいため掲示板を利用して情報交流する形をとった。教員だけでなく、児童もこの掲示板を楽しみにしていて、「今月はこれやってるんや」等他学年の取組みに興味深く読む姿が見られた。

参観・懇談時には保護者にも情報発信することができ、「全校の取組みがすぐ分かる」と好評だった。

#### 3年 7月 国語 まいごのかぎ

㊦ 3場面のりいこの気持ちを考える。

本時の学習の流れ

①グループでくらげチャートを考える

はじめは苦手だった子どもでもできるように。



②くらげの足を書いた後は、それをもとにりいこの気持ちをグループで考える。



③グループごとに発表した後、クラス全体でまとめる。

子どものノート



まいごのかぎの学習の流れ

①とらえよう…場面分けをして、物語の全体をとらえる。

本時②ふかめよう…場面ごとのりいこの気持ちを、根拠を持って考える。

③まとめよう…りいこの気持ちがどのように変化していったか考える。

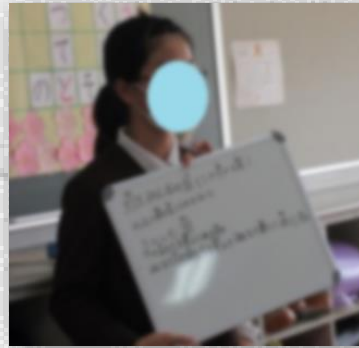
④ひろげよう…「おもしろいな。」「すきだな。」と思ったところを中心に感想を書いて、友だちと読み合う。

### 3.縦割り活動 「レインボータイム」の設置

令和4年度より生活指導部主導による「レインボータイム」という縦割り班での活動を取り入れた。

学級のみでは人間関係も役割も固定され、活躍の場も限定されてしまうが、縦割り班での少人数組織では、一人ひとりが大きな役割を担い、協力して活動することが不可欠となる。それぞれが主体となって「伝えあう」、「つながりあう」取組みを設定することで、高学年はリーダーとしての役割を意識する。また、本校の研究テーマである「根拠をもって自分の考えを表現できる児童の育成」の取組みとして 表現力をのばす面でもお手本となる効果が期待された。児童が多くの教師とつながり、新たな側面を発見し力を伸ばす試みとして効果が見られている。

クリーン大作戦や音楽会、運動会等、レインボー班で学校行事や特別活動に位置づけて活動を進めた。立案には、生活指導部だけでなく、教務部や保健体育部など複数の部会も関わって教職員どうしのつながりを生む場ともなっている。



#### 「クリーン大作戦」

15人で協力して手際よく掃除ができるように取り組んだ。



#### 「音楽会」

1組団～3組団に分かれて学年ごとに音楽を発表した。感想を伝え合って交流し、がんばりを認め合う機会になった。



#### 「はじめまして! レインボータイム」

異学年の友達と出会いの会。全員で班の目標を話し合った。その後、みんなが仲良くなるために6年生が工夫してゲームを進行し、交流を深めた。



#### 「七夕集会」

班ごとに笹を飾り付けたり、クイズラリーを楽しんだりした。



# 4. 校内研究授業と事後検討会の活性化

年間1回ずつ各学年の校内研究授業を設定し、当該学年は全クラス一斉に授業を公開することにした。「まなびプラン」の一環として授業を実施するため、参観シートの項目もプラン内の実践内容に合わせた内容に統一した。

授業終了後、「ワークショップ型研修」のスタイルで事後検討会を開催。討議グループは5人程度で毎回入れ替え制とし、司会役となるファシリテーターは全員が経験できるよう持ち回りで担当した。

従来、付箋を模造紙に貼り付けて意見を整理していたが、今年度よりGoogle Jamboardを用いてパソコン上で意見を記入した付箋を貼り付け、すばやく全体共有する方向に変更した。その利点として、討議結果を文書や画像として保存できる、討議時間も短縮できる、若手教員でも意見を発表しやすい、次回の討議でも見直しが簡単となる・・・等、多数挙げられる。グループを固定しないことで多数の教員と関わる場を持つので、討議に加えて日々の相談や情報交換も行う姿が見られ、短い時間を有効に活用することができた。

## <校内研究授業>



## <事後検討会>

A	6年 自分の考えを表現する際、根拠を示すことができているか。						B	3年 思考ツールは、根拠を持つこと、考えを表現することに対して有効か。							
自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	根拠を示すことができていた。	根拠に話し合いができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。	自分の考えを表現する際、根拠を示すことができていた。
改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策	改善策



各グループの付箋を整理し、「学校全体で取り組むべき内容」を確認することで、明日からの取組みにすぐ取り入れられる

「Google Jamboard」上での共有

# 5. 児童・家庭・地域と つながるための情報発信

## (1) 学校だより・ホームページによる発信

研究テーマや日々実践を積み重ねている「つながる」取組み、各学年の「まなびプラン」について、学校だよりやホームページを効果的に使い家庭や地域へ情報を発信している。各学年で今どんな取組みをしているか、どんな目標をもって学習しているかを紹介することで、家庭での会話の一助とし、家庭学習の内容も親子で共に考えるためのきっかけとなってほしいという願いからである。「ともに育てる」意識で子どもたちを教育するために今後もこまめに情報を発信していきたい。

令和4年度 学校だより 5月号  
**東忠岡小学校**  
 学校教育目標：「よく学ぶ子 心豊かな子 元気な子」の育成をめざす  
 重点目標：「根拠をもって自分の考えを表現できる児童の育成をめざす」

とりく  
**「つながる」取組みがスタート!**  
 校庭の木々の若葉がさわやかな風に揺られ、校庭に子どもたちの元気な声が響いています。学校生活も早いもので5月を迎えます。

さて、今年度の重点目標「つながる」取組みがスタートしました。4月20日の前期児童会役員・学級代表・各委員会委員長の任命式で、全校児童には「任命されたリーダーとみなさんがつながって東小を作っていきます」と伝えました。また、同日、6年生と1年生がつながって1年生のために校内巡りを行いました。6年生がとても頼もしかったです。

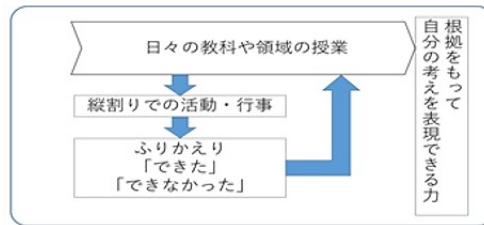
すでにご案内させていただいている今年度の運動会は、縦のつながりができるプログラムを計画しています。1組団、2組団、3組団で競技・応援等をする予定です。

授業では、教科を横断的につなげた取組みを発達段階に応じて以下の4つの力を高め、重点目標につなげます。

- ①整理する力
- ②発信する力
- ③思考力・判断力・表現力
- ④学びに向かう力

これらの力を子どもたちに授業でつなげるために、教職員対象の校内研究の日程で教職員対象の校内研究授業を実施対象の学年のみ5時間の学年は4時間授業（給食あり）

ほんこう じどう がっこう ちから なが  
**本校の児童が、学校で力をつけていく流れ**  
 本校の重点目標、児童に「根拠をもって自分の考えを表現できる力」をつけるために、以下のような流れで取り組んでいます。  
 ○日々の教科や領域の授業で、力をつける。  
 ○その力を、レインボータイム、行事などで発揮する。  
 ○ひとりひとりが課題をふりかえり、次の目標をめざす。  
 ○日々の授業でその課題をのりこえるための力をつける。



9月号

令和4年度 学校だより 11月号  
**東忠岡小学校**  
 学校教育目標：「よく学ぶ子 心豊かな子 元気な子」の育成をめざす  
 重点目標：「根拠をもって自分の考えを表現できる児童の育成をめざす」

あき まな ぶか  
**秋・・・学びが深まる**

10月後半より、ようやく秋らしくなりました。学校の木々も色づき始め、落ち葉が多くなってきました。児童は、秋の遠足などの校外学習でたくさんの楽しい思い出を作りました。5年生はパラリンピア出前授業での車椅子バスケットボール、3年生は南海電車出前授業も経験しました。

11月です。11月は学びが深まる時期です。学校での学習や行事でも、児童が自ら学ぶ場を多く作っています。5年生は、高石・忠岡連合音楽会に参加します。東忠岡小学校の代表として、元気いっぱい歌を熱心しています。6年生は、小学校生活最大の行事である修学旅行があります。6年生全員が良い思い出になるよう行動しましょう。

本校では、児童の学びをより深めるため、教職員で授業の研究を行っています。6年生と3年生の授業研究を終えて学校全体で取組む内容を以下のようにまとめました。

【発表（話し方）の型を整える】

- ★聞き手の姿勢にも着目
- ★発表するときのルール⇒発達段階に応じて設定
- ★話し合い活動の活性化⇒回数の確保
- ★ボリューム、姿勢、声のトーン等、基礎的な技術からステップアップ

【「根拠」を示すための技法】

- ★まずは接続詞の使い方から⇒「なぜなら」だけではなく、いろいろなパターンで練習する必要
- ★「思考ツール」の活用 書くこと・話すことが苦手な児童には有効。まずはツールで考えを整理させる。ゴールは「自分の言葉で説明できること」



## (2)家庭学習チャレンジ週間を通じた 家庭との情報交流

児童の家庭学習定着と生活習慣改善にむけ、従来から学期に1回ずつ実施している「家庭学習チャレンジ週間」の取組みも以下の通り見直しを行った。

- ①チャレンジ項目に、「**学校で学んだことを家庭で話す**」という項目を追加
- ②上記の内容を説明するため、4年生以上がタブレットを持ち帰り、発表スライド等を見せながら児童が保護者に話す場を設定
- ③保護者からのコメントを、**Web上でアンケートを実施して回収する**形に変更（第2回より）

以上の変更により、家庭でのコミュニケーション促進をはかるとともに「伝える」力を養う、予習復習や自主学習への意欲付けを狙ったが、回を追うごとに熱心に学習内容を伝える児童が増え、保護者も話を聞けるのを楽しみこしている様子がアンケートから見てとれた。親子のコミュニケーションのきっかけづくりとなるとともに、今後さらに意欲的に家庭学習に取り組む児童が増えていくよう継続的に支援していく。

家庭学習チャレンジシート

めざせ！家庭学習名人！（1,2年生用）

20日(月)提出

家族でチャレンジ

ねん くみ なまえ ( ぼん )

☆家庭学習のながれ

①まずいちばんに、今日のしゅくだいをしっかりやりましょう。  
②しゅくだいがおわったら、自主学習(お手紙など)をしましょう。  
③今日の家庭学習をふりかえり、今日の学習のじゅんぴをしましょう。  
もくひょう (おうちのひととそうだんしてかこう。)

家庭学習 3つのやくそく

①きまったじこくに学習しよう。  
②集中して学習しよう。  
③わすれものがないかたしかめよう。

項目	できた	できなかった	13日(月)	14日(火)	15日(水)	16日(木)	17日(金)	〇の数
7時までに起きる	できた	○						5
	できなかった	×						
朝ごはん	食べた	○						5
	たべなかった	×						
自分からおはようのあいさつ	できた	○						5
	できなかった	×						
家庭学習の宿題を全部する	できた	○						5
	できなかった	×						
家庭学習のお手伝い	できた	○						5
	できなかった	×						
読書 (おうちの人の読み聞かせもふくむ)	できた	○						5
	できなかった	×						
昨日の朝にれんらくちょうを見て時間わりをあわせる	した	○						5
	しなかった	×						
えんぴつをけずって、ふでこのなかみをてんけんする	した	○						5
	しなかった	×						
今日学校で勉強したことをおうちの人に話す	できた	○						5
	できなかった	×						
9時までにねる	できた	○						5
	できなかった	×						
1日の合計								



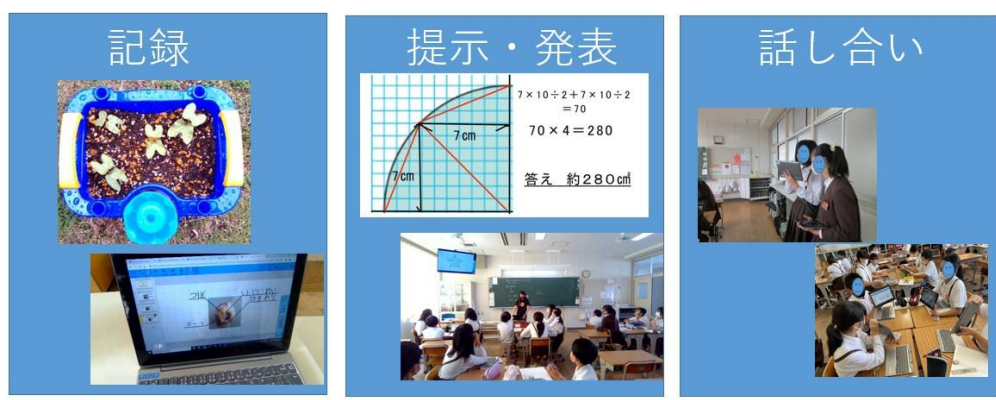
### 「めざせ！家庭学習名人！」

項目ごとにグラフ化し、学期ごとの参観時に掲示した。早寝早起きや読書等、課題が残る項目を目立たせ改善を促したが、大きく変化させるのは難しかった。今後も同様の取組みを継続し、生活・学習習慣をさらに改善させていきたい。

## 6. ICTの活用による個別最適な学び・協働的な学びの実践研究

令和3年度より継続しているICT実践内容研究を、令和4年度も実践方法の蓄積・共有を継続した。

ICT機器の得意・不得意をふまえた指導方法が向上し、児童の操作能力はもちろん、ICTを用いて記録する、提示・発表する、グループ単位で話し合う等タブレットを有効活用して学習に生かす授業プランが確立しつつある。この分野でもPDCAサイクルを繰り返し、学習状況の評価やさらなる改善を繰り返して、児童の学びをよりよいものにしていくための手段として、その実践を研修している。



### Topics

#### <町教育委員会による支援> ～日々のかかわりと情報発信～

##### 1. 調査研究校との日常的なかかわり

###### (1) 校内研究授業及び事後検討会に参加

全ての学年の校内研究授業及び事後検討会に参加した。毎回参加することで、取組みの進捗や子どもの成長等を肌で感じることができ、学校の実態に応じた指導・助言を行うことができた。また、学校長とカリマネ担当教諭及び講師として招聘している大学教授と研究授業の振り返りや今後の方向性について、その都度確認することができた。

###### (2) 教員との連携強化

日頃から学校訪問を頻繁に行い、学校長だけでなく、先生方とのコミュニケーションを大切にしたい。教職員からの生の声を聞くことができ、悩みに対して指導・助言していく中で、信頼関係の構築につながった。また、資料作成にあたり、管理職に許可をとった上で、Teamsを活用して、カリマネ担当教諭と直接やりとりをすることで、お互いの意見交流やデータ修正等、効率よく行うことができた。

##### 2. 域内の学校への発信

学力担当者会において、カリマネ担当教諭が取組みを説明する機会を設け、成果と課題、進捗状況等を域内で共有した。調査研究校の課題である「根拠をもって自分の考えを表現することができる児童の育成」については、本町の課題でもあることから、意見交流が活発に行われ、ICTの活用や思考ツールの活用、縦割り活動等、各校の実践につなげることができた。一番の成果は、**教科の枠を超え、全ての教育活動において自校の課題に迫っていくという意識が域内の教職員間で強くなったこと**である。





# 7. 取組みの成果と課題

## 成果について

この2年間の取組みの成果としては、次の3点が挙げられる。

まず、「つながり」をテーマに取組みを進めた結果、児童どうしが同学年・異学年問わずつながりを持てる場面を増やすことができた。学級内でも、ペアやグループ等のつながりを深める点を意識することができた。

また、情報共有のあり方を工夫することで、教職員の指導の方向性を一致させ、経験年数を問わず同じ方向を向いた指導が可能になった。そして、児童が表現できる場を増やしたことも成果の一つといえる。

## 課題について

この研究を通して、「児童が安心して表現できる集団づくり」ができていたかという点が、反省点として挙げられた。

解決するための手だてとしては、①自己肯定感と自己有用感を育む方法の工夫、②互いに認め合い、支え合える集団づくりの改善、③自己決定の場を提供する授業づくりの継続、④安全・安心な「居場所づくり」に配慮した授業改善の4点が挙げられる。

今回、これらの取組みの実践をすすめたことで、カリキュラムを俯瞰的に見直すきっかけとなった。そして、すべての教育活動はつながっているということ、そのつながりの中で、すべての児童にかかわっていくことが大切であるということを実教職員で再認識することができた。

今後も、すべての教育活動を自分事としてとらえ、持続可能な「チーム東忠岡」をめざし続けたい。

## 成果と課題

～授業づくりと集団づくりの両輪で～

### 成果

- ・つながる場面の増加
- ・課題に正対した指導の方向性の一致
- ・表現できる場の増加

### 課題

- ・児童が安心して表現できる集団づくり
- ①自己肯定感、自己有用感を育む工夫
- ②授業において、互いに認め合い・励まし合い・支え合える集団づくり
- ③自己決定の場を提供する授業づくりの継続
- ④安全・安心な「居場所づくり」に配慮した授業

